

# 病害虫発生予察情報（4月予報）

令和2年3月26日  
静岡県病害虫防除所長

## 1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (県平均平年値)	予報の根拠
ウンシュウミカン	そうか病	発生量：多	3月上中旬発生量：やや多（+） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：多い（+）
	ミカンハダニ	発生量：並 (寄生葉率4.0%)	3月上中旬発生量：並（±） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：多い（±）
カンキツ	かいよう病	発生量（中晩柑）：やや多 発生量（ウンシュウミカン）：多 (中晩柑 発病度(葉)0.8) (ウンシュウミカン 発病度(葉)0.2)	3月上中旬発生量（中晩柑）：並（±） (ウンシュウミカン)：多（+） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：多い（+）
果樹全般	カメムシ類	発生量：少	越冬虫量：少（-）
チャ	カンザワハダニ	発生量：少 (摘採面寄生葉率2.4%)	3月中下旬発生量：少（-） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：多い（-）
	チャハマキ	発生量：並 (幼虫数0.1頭/1.25m <sup>2</sup> )	3月中下旬発生量：少（-） 発生時期：早い（+） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：多い（±）
	チャノコカクモンハマキ	発生量：やや多 (幼虫数0.1頭/1.25m <sup>2</sup> )	3月中下旬発生量：並（±） 発生時期：早い（+） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：多い（±）
トマト	灰色かび病	発生量：多	3月中旬発生量：多（+） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：多い（+）
	葉かび病・ すすかび病	発生量：多	3月中旬発生量：並（±） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：多い（+）
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：多 コナジラミ類発生量：多	3月中旬発生量 黄化葉巻病：多（+） コナジラミ類：多（+） 気象予報：気温：高い（+）

作物名	病害虫名	予報 (県平均平年値)	予報の根拠
イチゴ	うどんこ病	発生量：やや少	3月中旬発生量：少（－） 気象予報：気温：高い（＋）
	灰色かび病	発生量：やや多	3月中旬発生量：並（±） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（＋）
	炭疽病	発生量：多	3月中旬発生量：多（＋） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（＋）
	アブラムシ類	発生量：多 (ただし中部地域は、やや少)	3月中旬発生量：多（＋） ただし中部地域は、少（－） 気象予報：気温：高い（＋）
	ハダニ類	発生量：多 (ただし中遠地域は、やや少)	3月中旬発生量：多（＋） ただし中遠地域は、少（－） 気象予報：気温：高い（＋）
	アザミウマ類	発生量：多	3月中旬発生量：多（＋） 気象予報：気温：高い（＋）

### コムギの赤かび病の防除適期について

今年度は暖冬の影響で、出穂期が平年より10～14日程度早まっています。  
赤かび病の防除適期は開花期前後なので、すでに出穂期に入っている場合は防除を実施してください。

#### 表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報  
はこちら  
で検索!



静岡県農薬安全使用指針  
・ 農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

## 2 予報の根拠と防除対策

### 【ウンシュウミカン】

#### <生育の概況>

生育は平年より早い。

#### ●そうか病

##### 予報の根拠

- ・ 3月上中旬の巡回調査では、葉での平均発病度は0.10（平年0.04）と平年よりやや多い発生であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は多いため、本病の発生を助長する。

##### 防除対策

- ・ 本病は新梢伸長期の降雨により感染が助長されるので、展葉期に予防散布を行う。
- ・ 被害のある夏秋梢は伝染源となるため、できるだけ除去する。

#### ●ミカンハダニ

##### 予報の根拠

- ・ 3月上中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は2.4%（平年2.5%）と平年並の発生であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、本種の発生を特には助長しない。

##### 防除対策

- ・ マシン油乳剤を散布する場合、散布むらや散布直後の降雨で効果が低下するので、晴天の日が2～3日続く時に防除を実施する。

### 【カンキツ】

#### ●かいよう病

##### 予報の根拠

- ・ 3月上中旬の巡回調査では、中晩柑類の葉の発病度は0.9（平年0.9）と平年並の発生であった。ウンシュウミカンの葉の発病度は0.16（平年0.05）と平年より多い発生であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は多いため、本病の発生を助長する。

##### 防除対策

- ・ 罹病葉のついた夏秋梢は、重要な伝染源となるので早急に除去する。
- ・ 防風垣、防風網の整備等を行い、防風対策に努める。
- ・ 中晩柑類では、発芽前、5月上旬及び下旬、6月下旬（梅雨期）に薬剤散布を行う。ウンシュウミカンでも、昨年または現時点で本病の発生が見られたほ場では、中晩柑類に準じた防除を行う。ただし、新芽は薬害が出るので発芽後～新梢伸長期は薬剤散布を避けた方がよい。また、ウンシュウミカンの銅剤散布は、中晩柑類に比べて果実に薬害が出やすい。

## 【果樹全般】

### ●チャバネアオカメムシ（越冬状況）

#### 予報の根拠

- ・今年1月における越冬量調査ではチャバネアオカメムシ越冬虫数が0.5頭/m<sup>2</sup>（平成1.1頭/m<sup>2</sup>）と平年より少なく、春期の発生量は県全体として平年より少ないと考えられる。ただし、西部地域では昨年秋の発生量が多かったため、念のため春期の発生にも注意する。

#### 防除対策

- ・地域やほ場によって発生状況が異なる場合があるため、ウメ・ビワではほ場における発生をよく観察し、早期発見・防除に努める。

## 【チャ】

### <生育の概況>

生育は平年並～やや早い。

### ●カンザワハダニ

#### 予報の根拠

- ・3月中下旬の巡回調査では、摘採面での寄生葉率0.2%（平成1.4%）、裾部での寄生葉率0.1%（平成2.4%）で、平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本種の増殖を特には助長しない。

#### 防除対策

- ・摘採面の葉に寄生が見られる茶園では早期に防除を行う。その際、葉裏に薬液が届くように散布する。
- ・凍霜害等を受けた茶園では、被害を受けなかった新芽にハダニが集まり集中加害することがあるので、防霜対策を万全にする。
- ・新芽がハダニの被害を受けた場合は、薬剤の摘採前日数に注意して直ちに防除を行う。

### ●チャハマキ・チャノコカクモンハマキ

#### 予報の根拠

- ・3月中下旬の巡回調査では、チャハマキの越冬幼虫数は0.06頭/1.25m<sup>2</sup>（平成0.34頭/1.25m<sup>2</sup>）と平年より少なく、コカクモンハマキの越冬幼虫数は0.2頭/1.25m<sup>2</sup>（平成0.3頭/1.25m<sup>2</sup>）と平年並nの発生であった。
- ・茶業研究センター設置の予察灯によるチャハマキの初誘殺日は、平年より早い。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、本種の増殖を助長する。

#### 防除対策

- ・昨年秋に発生が確認されている茶園では、一番茶芽で被害が発生する恐れがあるため、秋期に防除を実施しなかった茶園では防除を行う。

## ＜その他病害虫＞

### ●褐色円星病（緑斑症）

#### 防除対策

- ・3月中下旬の巡回調査では、県平均発病葉率は29.1%（平年17.6%）と平年より多い発生であった。これは、暖冬・多雨の影響で、秋期だけでなく、冬期においても病斑の拡大進展が助長されたためと考えられる。
- ・本病は、多発すると一番茶萌芽期から生育期に下葉が落葉し、品質・収量への被害が大きくなる。薬剤による防除適期は夏期以降となるが、被害は一番茶生育期に顕著となるため、被害が大きかった茶園では、この時期に発生状況を確認しておき、夏～秋期に防除を実施する。

### ●マダラカサハラハムシ

#### 防除対策

- ・近年、葉を食害される被害が発生した茶園が増加している。これらの茶園では一番茶芽に越冬成虫による被害が発生するおそれがあるため、一番茶生育期に薬剤防除を行う。

## 【トマト】

### ＜生育の概況＞

生育は平年並～やや早い。

### ●灰色かび病

#### 予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率17.7%（平年6.9%）と平年より多い発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、発生を助長する（本病の生育適温は18～23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

#### 防除対策

- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、施設内の除湿に努める（例として、不要な下葉を除去する、日中の換気を早めに行う、かん水量を必要最低限にする）。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため、速やかに取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。
- ・植物体への結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより施設内の湿度低下に努める。

### ●葉かび病、すすかび病

#### 予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率7.9%（平年6.6%）と平年並の発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、発生を助長する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度と比較的高温を好み、多湿条件下で発生が多くなる）。

## 防除対策

- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。
- ・本県では、12月以降は葉かび病が優占する傾向がある。

## ●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

### 予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、黄化葉巻病の平均発病株率は4.2%（平年2.7%）と平年より多い発生であった。
- ・コナジラミ類の平均寄生株率は12.9%（平年2.6%）と平年より多い発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を助長する。

### 防除対策

- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中深く埋めるなど適切に処分する。
- ・わき芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・今後、気温が上昇しタバココナジラミの発生に適した条件となる。成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、植物体を完全に枯死させ、黄色粘着板を設置し本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

## 【イチゴ】

### <生育の概況>

生育状況は平年並～やや早い。

## ●うどんこ病

### 予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.3%（平年1.2%）と平年より少ない発生であった。
- ・本病は気温が20℃前後のときに発生しやすい。1か月予報では、気温は平年より高く、本病の発生に適する。

### 防除対策

- ・株の過繁茂は本病の発生を助長させるため、不要な下葉、果梗枝は除去する。
- ・現在発病が少しでもみられるほ場では、早急に防除を行う。
- ・発病した果実は速やかに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

## ●灰色かび病

### 予報の根拠

- ・ 3月中旬の巡回調査では、平均発病株率は2.9% (平年2.9%) と平年並の発生であった。
- ・ 本病は気温が20℃前後で、多湿条件のときに発生しやすい。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は多いため、本病の発生に適する。

### 防除対策

- ・ 株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、施設内の除湿に努める（不要な下葉を除去する、日中の換気を早めに行う、かん水量を必要最小限にするなど）。
- ・ 発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除くとともに、枯葉、老化葉、不要な果梗枝も取り除き、ほ場外で埋没処分する。

## ●炭疽病

### 予報の根拠

- ・ 3月中旬の巡回調査では、平均発病株率2.1% (平年0.8%) と平年より多い発生であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は多いため、本病の発生を助長する。

### 防除対策

- ・ 発病が見られたハウスでは、温度管理に注意し、日中高温（25℃以上）にならないようにする。発病株は根から抜き取り、ビニール袋などに入れてほ場外へ持ち出し処分する。
- ・ 発病が見られたほ場の株は潜伏感染している恐れがあるので、健全に見えても親株にしない。また、発病が見られたハウスでは夏に土壌消毒を徹底する。

## ●アブラムシ類

### 予報の根拠

- ・ 3月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は東部地域では1.8% (平年0.8%)、中遠地域では5.8% (平年0.4%) と平年より多い発生であったが、中部地域では0.6% (平年3.4%) と平年より少ない発生であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

### 防除対策

- ・ アブラムシ類の発生に注意し、初期防除に努める。すでに発生しているほ場では早急に防除する。
- ・ 天敵を利用している場合は、アブラムシ類のマミーの発生状況をよく観察する。薬剤散布する場合は、天敵（カブリダニ、アブラバチ等）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

## ●ハダニ類

### 予報の根拠

- ・ 3月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は東部地域では7.0% (平年5.7%)、中部地域では39.2% (平年25.0%) と平年より多い発生であったが、中遠地域では5.8% (平年9.8%) と平年より少ない発生であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

## 防除対策

- ・ハダニ類の寄生が認められた場合は少発生のうち防除を徹底する。なお、ハダニの発生している株が点在している場合は、発生株周辺にスポット散布するなど迅速に対応する（ただし、農薬の総使用回数に注意する）。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、物理的に作用する剤（気門封鎖剤）や天敵を利用する。なお、物理的防除剤は卵への効果が低く、残効性が期待できないため、5日前後の間隔で連続散布する。
- ・天敵を利用している場合は、ハダニ類と天敵の発生状況をよく観察し、天敵の追加放飼または薬剤散布をする。薬剤散布する場合は、天敵（カブリダニ、アブラバチ等）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

## ●アザミウマ類

### 予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では平均寄生株 25.1%（平年 9.7%）と平年より多い発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

### 防除対策

- ・アザミウマ類は花を好むため、花での発生をよく観察する。また、必要のない花は摘み取る。
- ・アザミウマ類の早期発見に努め、発生初期に薬剤散布を重点的に行う。
- ・天敵を利用している場合は、天敵（カブリダニ、アブラバチ等）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。
- ・薬剤感受性の低下を避けるため、作用機構分類コードを参照し、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
- ・施設内外の雑草や花き類は、アザミウマ類の発生源となるため、除去する。
- ・施設開口部には防虫ネット（目合 1mm 以下）を被覆し、施設外からの成虫の侵入を防ぐ。ただし、被覆により施設内の温度・湿度が高まるため、換気に注意する。
- ・4月以降気温が高くなると、ハウスを開けることで飛び込みが増えるため、注意する。
- ・栽培終了後は施設を密閉して、蒸し込み処理を 10 日以上行い、残存虫を死滅させる。



## 【イネ】

### <その他病害虫>

#### ●苗立枯病、いもち病(苗いもち)、ばか苗病、もみ枯細菌病、イネシンガレセンチュウ

##### 防除対策

種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）

- ・自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
- ・「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準（ホームページ<http://www.s-boujo.jp/>）」に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
- ・厚まきは発病を助長するため、適正な種量を守る。

##### 育苗管理

- ・出芽期は30℃以上、緑化期は25℃以上の高温とならないよう温度管理に注意する。
- ・シルバーポリシートによる育苗では高温多湿になりやすいため、換気を行い温湿度管理に注意する。
- ・本県では、MBI-D剤（ウィン、デラウス、アチーブ）に対し、いもち病で耐性菌の発生事例がある。また、他県ではQoI剤（嵐、アミスター、オリブライト、イモチエース、イモチミン、オリザトップ）でも、いもち病で耐性菌の発生事例がある。これら耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準（ホームページ<http://www.s-boujo.jp/>）」の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料の掲載について」の項を参照）。

#### ●縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

##### 防除対策

- ・常発地では媒介虫となるヒメトビウンカの防除を徹底する。

#### ●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ等）

##### 防除対策

- ・主要種のアカスジカスミカメは雑草に産み付けられた卵で越冬し、春に孵化する。孵化直後は、水田周辺のイネ科雑草（スズメノテッポウ、セトガヤ、早生型チガヤ）が寄主植物となることから、4月中に除草すると効果的である。ただし、成虫の行動範囲は最大で半径 300m 程度と広く、個々の水田周辺を除草するだけでは十分な防除効果が得られない場合もあるため、地域ぐるみで除草することが重要である。

#### ●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

##### 防除対策

- ・県内全域で分布が徐々に拡大している。昨年は暖冬の影響で多発したが、今年も暖冬であり、今後も気温が高くなる予報であるため注意を要する。
- ・昨年の7～9月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。貝を破砕するため、3月までにロータリー耕を実施していない場合は速やかに実施する。ロータリー耕は通常の荒起こしより車速を遅くし、ロータリーの回転を上げて浅く高速で耕すと効果が高い。
- ・周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を破砕する。なお、スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。

## 【コムギ】

### <その他病害虫>

#### ●赤かび病

##### 防除対策

- ・今年度は暖冬の影響で、出穂期が平年より10～14日程度早まっているため、防除時期が早まる可能性がある。すでに出穂期に入っているほ場は薬剤防除を実施する。
- ・防除適期は開花期前後となるので、一回目の薬剤散布を穂揃期から5日目までに行い、さらにその5～7日後に二回目の薬剤散布を実施する。
- ・出穂期から乳熟期にかけて、気温が高く降雨が続くような場合は注意する。

#### ●うどんこ病

##### 防除対策

- ・昨年4月下旬の巡回調査において、本病が多発していたほ場がいくつか見受けられた。本県の奨励品種である「きぬあかり」は、うどんこ病にやや弱いことが分かっている。また、本病の第一次伝染源は前年の被害残渣で越冬した病原菌である。よって、前年多発したほ場では発生に注意し、防除を検討する。
- ・初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・窒素肥料の過多を避ける。

### 3 季節予報

#### ● 1か月予報 (東海地方 令和2年3月19日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 3月21日から4月20日

#### 【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるとでしょう。平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

向こう1か月の平均気温は、高い確率80%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率70%です。3～4週目は、高い確率50%です。

#### 【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	10	80
1か月	降水量	30	30	40
1か月	日照時間	30	40	30
1週目	気温	10	10	80
2週目	気温	10	20	70
3～4週目	気温	20	30	50

#### 【予報の対象期間】

- 1か月 : 3月21日(土)～4月20日(月)  
1週目 : 3月21日(土)～3月27日(金)  
2週目 : 3月28日(土)～4月3日(金)  
3～4週目 : 4月4日(土)～4月17日(金)

#### ※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1よりも多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1  
TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780  
URL <http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>